研究紀要論文抄録

本追モニター調査の結果を利用した傾向スコア加重法による本追試験間の難易度比較

研究開発部試験作成支援研究部門　吉村　宰
研究開発部試験作成支援研究部門　荘島　宏二郎

大学入試センター試験は毎年，本試験と追試験の２回の試験が行われている。両試験とも区別なく同一年度の大学入学者選抜に利用されることを考えると，その難易度は理想的には同一であることが望ましい。また，平成15年度からは法科大学院適性試験も実施されるようになったが，これも同一年度内に本試験と追試験の２回の試験実施が予定されており，両試験の難易度に大きな違いが生じないことが期待されている。しかし，本試験と追試験では，出題される問題と受験者の両方が異なるため，問題の難易度の比較は原理的に不可能である。

大学入試センターでは，毎年，大学１年生400名を対象とし，センター試験の本試験と追試験の両方を受験させる（モニター調査と呼ばれる）ことで，難易度の比較検証を行っている。しかしモニター調査には，参加者は学力の高い層に偏っており本追試験の平均点差などの調査の結果をそのままセンター試験実受験者全体にあてはめることはできない，という問題点がある。

本稿では，モニター調査の結果を利用し，センター試験本試験受験者が仮に追試験を受験した場合の追試験の平均点及び標準偏差を推定する方法を提案するとともに，実際のデータに適用し，その可能性を検討した。具体的には，1）傾向スコア加重修正法によってモニター調査参加者の本試験の得点分布を実受験者集団のそれに可能な限り近似し，その際の傾向スコアを用いて，モニター調査参加者の追試験の得点分布を加重修正する，2）加重修正されたモニター調査追試験得点分布と実受験者による本試験得点分布とを比較する，である。

この手法を平成15年度の国語I・II，及び平成15年度法科大学院適性試験そ

れぞれのモニター調査のデータに適用し，各試験の本試験受験者が追試験を受験した場合の得点分布を求めその平均点や標準偏差を比較することで，本試験と追試験の難易の違いを検証できることを示した。